

「代償」

【登場人物表】

朝宮清佳 (13) 中学一年生

(6)

高見実夕 (13) 清佳の親友

山口千晶 (13) 清佳のクラスメイト

朝宮景子 (36) (29) 清佳の母

朝宮貞一 (39) 清佳の父・故人

山口千恵子 (46) 千晶の母

竹下亜佐美 (13) 清佳のクラスメイト

野田樹里 (13) 清佳のクラスメイト

老婆 (80) 呪い仲介人

木村高信 (38) 教師

運転手

女子A

女子B

その他

○朝宮家・アトリエ（夜）

画材道具やイーゼルが無造作に置かれた室内。埃っぽくて、灯りはついていない。窓から差しこむ月の光のみが室内を照らしている。  
キャンバスに向かって絵を描いている朝宮貞一（39）とその後ろの小さな椅子に座っている朝宮清佳（6）。  
清佳、朝宮の背中を見つめて

清佳 「ねえ、お父さん」

朝宮 「ん？」

清佳 「お父さんは、どうして怒ったの？」

朝宮 「怒ったかな？」

清佳 「うん、見た」

○（イメージ）同（朝）

アトリエの窓から外を覗いている清佳。  
立派な日本建築の母屋と大きな庭園。  
外門前でスーツ姿の男に怒鳴っている朝宮と間に割って入っている朝宮景子

清佳の声「朝来たお客さんに怒ってたよ。帰れって」

○元の朝宮家・アトリエ（夜）

朝宮、微笑んで

朝宮「一人でアトリエに入ったんだね」

清佳「：：ごめんなさい」

朝宮、絵を描きながら

朝宮「私はね、清佳。尊敬できない人間には何もしないんだ。本当は言葉だって交わしたくない。尊敬出来る人にしか、私の絵は持っていてほしくないんだよ」

清佳「尊敬って？」

朝宮「大切ってことさ」

清佳「じゃあ、お母さんのことも尊敬？」

朝宮「もちろん。景子さんはこの世界で一番尊敬している人だ。彼女になら全て任せられる」

清佳「私のことは？」

朝宮「それは清佳がどんな大人になるかどうかで決まるね」

残念そうに俯く清佳。

朝宮「清佳。信念を持ちなさい」

清佳「信念？」

朝宮「そう。自分だけが信じられるもの。大切だと思えるもの」

清佳、朝宮の背中を見つめている。

朝宮「信じるものを持つと人は強くあれる。

そして大切なものを守ることができるとだ。わかったね」

清佳「それがあれば、お父さんは私を尊敬してくれませんか？」

○同・アトリエ・外観（朝）

庭の隅に建つ小さな別邸。

早朝の日が照らす中、屋根には小鳥がとまっている。

○同・アトリエ（朝）

画材道具やイーゼルなどが乱雑に置かれて  
いる室内。小さな椅子に座っている  
るセーラー服姿の朝宮清佳（13）。

清佳の前にはイーゼルにたてられた真  
つ白なキャンバスがある。

清佳「信じられるもの、か」

白いキャンパスを見つめる清佳。そこ  
へアトリエに入ってくる朝宮景子

（36）。

景子「清佳。何してるの？ 朝ご飯、出来て  
るよ」

清佳「ん。父さんに会ってた」

景子「あいつはここにはいないだろ。今ごろ  
地獄にいるね」

清佳「嫁のセリフ？ それ」

景子「いいの。私も死んだら同じところ行く  
んだから。そんなことより今日から中学生  
でしょ、早々遅刻するわよ」

アトリエを出て行く景子。

清佳、景子を見送り、白いキャンパスに視線を戻す。

清佳の心の声「信念を持って。それは私が父から教わったたった一つの教えだった。そして、私の原点といえるくらい大切なものとなっっている。けれど」

清佳、立ち上がりキャンバスを軽く突いて

清佳「いってきます」

清佳、微笑んでアトリエを出て行く。  
アトリエには誰もいなくなり、白いキャンパスが残される。

清佳の心の声「強い信念は呪いにもなり得る。

このときの私は、それをまだ知らなかった」

タイトル「代償」

○道（朝）

通学路を一人歩いている清佳。

そばには同じ制服を着た男女がちらほ

らと見受けられる。

清佳の近くを通る女子Aと女子B。

女子A「朝宮さん、おはよう」

清佳「ああおはよ」

女子B「クラス一緒だといいいね」

清佳「うん」

女子A「じゃあまたね」

互いに手を振り、去って行く女子Aと

女子B。

清佳、うんざりした顔で二人の背中を

見送る。

清佳「心にもないことを」

実夕の声「清佳ちゃん」

怪訝な顔で振り返る清佳。

清佳と同じセーラー服を着た高見実夕

(13)が立っている。

清佳、驚いて

清佳「実夕？ あんた私立受けたんじゃない

の？」

実夕「あはは、えつと……滑っちゃって」

清佳「滑ったって、あなたの成績でそんなことあるわけ」

実夕、意味ありげに微笑む。

清佳、察して出かけた言葉を飲み込む。

清佳「教えてくれればいいのに」

実夕「驚かそうと思って。実はここで待ち伏

せしてたんだ」

清佳、嬉しそうに実夕を小突く。

清佳「実夕と同じ学校とか、塾で同じなだけ

だったから変な感じ」

実夕「ホントに」

笑い合う、清佳と実夕。

清佳「行こ。同じクラスだといいいね」

実夕「うん」

歩き出す、清佳と実夕。

○晴良中学校・昇降口前（朝）

満開の桜並木を歩いてくる清佳と実夕。

清佳「桜すっごいね」

実夕「うん、きれい」

昇降口前までやってくる清佳と実夕。  
教師が配っている紙を受け取る。紙に  
はクラス名簿一覧が載っている。  
清佳「えっと、私は1 | Aか。お、実夕もじ  
ゃん。同じクラスだ」  
実夕「ホントに？」  
実夕、クラス名簿を見て笑顔になるも  
次第に表情に陰が差す。  
清佳「実夕？ どうした？」  
実夕「え：：あ、ううん。なんでも」  
清佳、意地悪く笑って  
清佳「わかった。嫌いなやつとも同じクラス  
だったんでしょ。どいつどいつ？」  
実夕「そ、そんなんじゃないから」  
清佳「素直じゃないねえ。好き嫌いなんてあ  
るのが普通でしょ」  
実夕「清佳ちゃんのはつきりし過ぎ」  
清佳「素直って言ってほしいね」  
清佳、先を歩き出して  
清佳「ほら、行くよー」

実夕「待ってよー」

校舎に入っていく清佳とそれを追いかける実夕。

遅れてそのあとにやってくる山口千晶（13）。楽しそうに話している清佳と実夕の姿を見て、気に入らないという目つきをしている。

○同・教室（朝）

賑やかな教室のなかで話している清佳と実夕。

清佳「クラス一緒なのは良かったけど、あとは担任ガチャだな。これだけでもけっこう違うぞー」

実夕「確かに。私は女の先生がいいな」

清佳「塾の先生は女の人多かったよね、三浦先生とかよかった。塾は継続でしょ？」

実夕「うん。そのつもり」

清佳「そっか、やめてもいいかなって思ったけど、実夕がいるなら母さんに頼んでみ

ようかな。そうすれば学校終わりに一緒に  
行けるしね。制服で行くのもアリか」

実夕「時間まで図書室で宿題するとか？」

清佳「悪くない。じゃあ放課後さ、図書室行  
つてみようよ。卒業までにここの蔵書読破  
するのが目標だったんだ」

実夕「相変わらず、本の虫だね清佳ちゃん」

清佳「小学校じゃ、唯一の心の友だったんで  
す、はい」

実夕「え、清佳ちゃん人気者じゃないの？」

清佳「そんなわけないでしょ。私が生き生き  
と話してる姿に驚いている同小の視線を  
感じないのか？」

実夕、周りを見渡す。思いのほか目が  
合った女子生徒が多く、すぐに目を逸  
らす。

清佳「ね？」

実夕「清佳ちゃん、カッコイイから友達たく  
さんいると思ってたけど」

清佳「まさか。はつきりし過ぎなせいで腫れ

物扱いよ。まあ気にしてないけど」

実夕「……やっぱりカッコイイね、清佳ちゃんは」

清佳、照れた顔で

清佳「ていうか、実夕は仲良い子同じクラスにいないの？ 私はいいから話しておいでよ」

実夕、気まずそうに微笑む。

清佳「実夕？　どうかし」

亜佐美の声「(遮って) 高見」

高圧的な声にビクツとする実夕。

教室の扉付近には千晶、竹下亜佐美(13)、野田樹里(13)の三名の姿。

実夕「ご、ごめんね。清佳ちゃん。私行くね」

実夕、慌てて千晶たちのもとへ走っていく。

千晶、亜佐美、樹里の三名が清佳のこ  
とを睨み付けると、教室を出て行く。

清佳、冷めた目で

清佳「……おやおや」

○朝宮家・アトリエ（夜）

真っ白なキャンバスに向かい、椅子に

座っている清佳。

やってくる景子。

景子「またここにいたか。自室にいなさいよ、  
ここまで呼びに来るの面倒なんだから。晩  
ご飯出来たよ」

清佳「この方が落ち着くんだよね」

景子「画家の血かね。あんた絵くっそ下手だ

けどな」

清佳「うるさいな」

景子「中学となると成績表が残酷なのよね。

美術の成績はーか」

清佳「決めつけるなし。二くらい取ります」

景子、清佳の様子を見て

景子「帰ってきてから元気ないね。中学生に

なったんだし、スマホ買ってやろうか」

清佳「いらぬ。あれ持ってるとろくなこと

なさそう」

景子「今どきの女子とは思えんな」

景子、近くの椅子に座って

景子「で、何があったの？」

清佳「：：別になににも。ああでも実夕と同じクラスになったかな」

景子「実夕ちゃん？ 私立行くって言ってなかつたっけ？」

清佳「滑ったらしい」

景子「あれま」

清佳「嘘っぽいんだけどね」

景子「あれあれま。どして？」

清佳「さあわかんない。話したくなさそうだったし、聞かなかった」

景子「ふーん。でもよかったじゃん。唯一の友達だったでしょ。あんた嫌われ者だもんね。親父に似て」

清佳「親の言葉とは思えんな」

景子「顔を見合わせて笑う清佳と景子。それで、なんか問題ありなの？」

清佳「問題ってほどじゃないよ。ただ実夕がいるグループに私は入れそうにないって

だけ」

景子「あんたはどこにも入れんでしょ」

清佳「いちいち一言多いな。まだ話してないけど我が強いタイプが多そうなんだよ。私が入ると実夕を板挟みにしそうだから」

景子「気になってるのは本当にそこだけ？」

清佳「……」

○（回想）晴良中学校・教室

学校が終わり、それぞれが帰り支度をしている。

実夕、千晶、亜佐美、樹里の四名が早々に教室を出て行く。

実夕、無理矢理作った笑顔を清佳に向けて去って行く。

○元の朝宮家・アトリエ（夜）

話している、清佳と景子。

清佳「あんまり仲良さそうには見えないって  
いうか……実夕が無理してる様子なのが

ちよつと気になつてる、かな」

景子「景子、悩む清佳を見て明るい声で

景子「まっ、小学校からのグループなんだし  
それぞれ色があるでしょ。下手に首つつこ  
まないで様子見るほうがいいかもよ。入学  
したばかりなんだし」

清佳「そうだね」

景子「はい、ご飯ご飯。お腹減ったぞ、私は」  
アトリエを出て行く、景子。  
清佳、ため息をついて切り替えるよう  
に立ち上がり、景子の後に続く。

○晴良中学校・外観（朝）

多くの生徒が登校している。  
ピンク色の桜の木は葉桜となつて緑色  
へと彩っている。

○同・昇降口内（朝）

下駄箱が整然と並んだ広い場所。  
登校してきた清佳が靴を履き替えてい

る。

後ろからやってくる実夕。

清佳「おはよ、実夕」

実夕「おはよ、清佳ちゃん」

疲れた様子の実夕。

清佳、そんな実夕の様子には触れず

清佳「今日、塾行くでしょ。いつものバス停

で待ってるね」

実夕「：：うん、わかった」

実夕、靴を履き替えようとした動きが

止まる。

清佳「どうしたの？」

清佳、実夕の下駄箱を覗くも実夕の上

履きが入っていない。

実夕「あ、そうだ。洗おうと思って持って帰

ったんだった。忘れてきちゃったよ」

清佳「：：ドジだね」

実夕「あはは、スリッパ借りてくる」

実夕、足早に去って行く。

清佳「：：」

清佳、実夕の下駄箱の扉を一瞥して乱暴に閉める。

○同・教室（朝）

喧騒で満ちた室内。清佳は一人自分の席で本を読んでいる。清佳、ふと実夕の方を一瞥する。実夕、千晶、亜佐美、樹里の四名が集まって談笑しているが、一人だけスリッパを履く実夕だけが会話に参加していないように見える。ふと、千晶が清佳の視線に気付き、余裕のある好戦的な目で見つめてくる。清佳、不自然なく目を逸らす。

○同・図書室（夕）

一人、勉強している清佳。開いたノートは真っ白で、持っているペンを苛つくように動かしている。

清佳「……」

清佳、ふと時計をみて時刻が四時半であることに気付く。

清佳「いい加減、問い詰めるか」

清佳、立ち上がる。

○同・廊下（夕）

廊下を歩いている清佳。ふと窓の外を見ると一人でいる実夕の姿をみつける。

実夕、ゴミ捨て場でしゃがんで何かを拾っている。

清佳、それを見て焦りを見せて走り出す。

○同・ゴミ捨て場（夕）

ゴミ捨て場でしゃがんでいる実夕。

やってくる清佳。

清佳「実夕、なにやってるの？」

実夕、立ち上がり慌てて振り返る。手に持っている物後ろに隠す。

実夕「清佳ちゃん……帰ってなかつたんだ」

清佳「そんなのどうでもいいよ。いま何隠した？」

実夕「あ、いや」

清佳、歩み寄って実夕が隠した物を強引に取り上げる。実夕が隠していたのは教科書やノート。水に濡れてページは破れている。

清佳「これ実夕のだよね」

実夕「……」

清佳、実夕の後ろのゴミ捨て場に目を向ける。その他の教科書や私物が散乱している。

清佳「今朝、上履き隠されてたんじゃないの？」

実夕、俯いて黙っている。

清佳、ため息をついて踵を返す。

慌てて清佳の手を掴んで止める実夕。

実夕「な、なにをするの？ 清佳ちゃん」

清佳「先生に山口さん、だっけ？ あいつの

住所教えてもらっわ。言っっちゃめさせる」

実夕「待って待って。それはだめ！」

清佳「いやだってあいつが主犯でしょ。大丈夫だよ、あとの二人の家にも行くから」

実夕「そういう意味じゃなくて！ 山口さんのお母さん、保護者会の偉い人なの。お父さんはこのあたりの大地主らしいし。目を付けられたら何されるかわかないよ」

清佳「実夕、私はあいつを怒りに行くの。あいつの親とか立場とか関係ある？」

実夕「それは……でもそんなことしたら清佳ちゃんか」

清佳「私は平気。それより実夕がこんな目に遭ってることが我慢できない。薄々は気付いてたんだけど、見た以上黙っていられないわ。私が一番嫌いなこと、実夕は知ってるでしょ」

実夕「卑怯なことは許さない、だよね」

清佳、頷いて

清佳「それが私の信念なの。大切な友達のためにこれは曲げられない」

実夕、唇を噛んで、清佳の腕を強く握

る。

実夕「……お願い清佳ちゃん。私が自分でなんとかするから」

清佳「実夕。もう入学してから一ヶ月以上経ってるんだよ」

実夕「お願い、だから」

清佳「相手は人を傷付けて笑う奴ら。やめてって言える？ 中学から始まったんじゃないでしょ？」

実夕、清佳の手を掴む手が震えている。

清佳「だったら一緒に行こ。私が隣りにいるから、それなら」

実夕「一人でやる。大丈夫だから」

実夕、逃げるようにその場を去る。

清佳「実夕っ！」

一人残される清佳。悔しそうに拳を強く握り、空を仰ぐ。

○バス停（夕）

バス停のベンチに座り、本を読んでいる

る清佳。頻繁に時刻を確認し、辺りを  
見まわしている。

清佳「……」

やがて、バス停にバスが来る。自動扉  
が開くも清佳は歩道を見つめている。

運転手「乗らないんですか」

清佳、ため息をつき、後ろ髪引かれな  
がらバスに乗り込む。

○バス・走る車内（夕）

数人しか乗客がない車内。

清佳、椅子に座り憂鬱な表情。

○（回想）朝宮家・アトリ工

キャンパスに向かう朝宮の後ろ姿。

朝宮「信念を持ちなさい。清佳」

朝宮を見つめている清佳。

朝宮「信じるものがあるというのは、人を強  
くするんだ。そしてそれは、大切なものを  
守ることができ」

○元のバス・走る車内（夕）

閉じていた目を開ける清佳。

清佳「大切なものを、守るためには」

清佳、決意を固めた表情で窓の外を見つめる。

日の光は落ち、外は夕闇へと変わっている。

○晴良中学校・教室（朝）

ホームルーム前の教室。生徒たちがそれぞれ会話に花を咲かせている。

清佳、自分の席につきながら実夕を見る。

千晶の席に集まっている亜佐美と樹里と実夕。談笑しているも実夕は会話に入っておらず愛想笑いを浮かべているだけ。

清佳、立ち上がり、千晶のもとに行く。

清佳「山口さん」

千晶、不快そうに清佳を見て

千晶「……誰だっけ？」

清佳「朝宮清佳。一応クラスメイト」

千晶「ふーん。その朝なんとかさんが私に何の用？」

千晶、実夕を睨み付ける。

実夕「き、清佳ちゃん」

清佳「ごめんね、実夕。黙ってるなんて無理だよ」

千晶「へえ、高見さんはこの人に何を言ったのかな？」

実夕、怯えるように俯いて黙る。

清佳「お互い嫌い合ってるみたいだし簡潔に言うけど。実夕にちよっかい出すのやめてほしいんだよね」

千晶「は？」

清佳、ボロボロになった教科書を千晶の机に置く。

清佳「これ昨日、ゴミ捨て場に捨てられてた。

実夕のなんだよ」

亜佐美、清佳に詰め寄って

亜佐美「ちよつと言いがかりつけるのやめてく  
くんない。あたしらがやった証拠でもある  
のかよ」

清佳「いやないけど」

清佳、冷めた目で亜佐美を見つめて

清佳「状況からして、あんたたちしかない  
からさ」

樹里「なにそれ、ふざけてんの」

清佳「ふざけてないよ。ていうかさ、証拠と  
かなんとか言ってる時点でおかしな話じ  
ゃない？ あんたらいつも仲良しこよし  
で一緒にいるじゃん。友達ならこれ見て驚  
くか心配するのが普通でしょ。その態度は  
自分でやってますって言ってるようなも  
んだと思うけど」

押し黙る、樹里と亜佐美。

清佳、喧嘩腰で

清佳「まあ、それでも違うっていうならいい  
けど。でもさ、実夕と友達ならもっと親身  
になつてくれないかな。一人で苦しんでる

んだよ。それとも知らなかった？　この子の今日履いてる上履き新品なんだよね？　なんでかって聞いた？」

清佳の威圧に言い返せない樹里と亜佐美。

千晶、挑発する声で

千晶「思い出した。あなた朝宮貞一の娘でしょ。あの変人画家の」

千晶、教室中に聞こえるような大きな声で

千晶「あの人、すぐ他人を罵倒するって有名だってね。お父さんが言ってたわ、絵を売ってくれて言ったら追いつかされたって。なるほどね。蛙の子は蛙だ。なんの理由もなしに他人を傷つける。だから早死にするのよね。去年、死んだんでしょ」

クラスメイトの注目が集まり、シンと静まる教室。

見つめ合う、清佳と千晶。

清佳「ねえ山口さん」

千晶「なあに？」

清佳「実夕の話をしてるのになんで父の話が出てくるの？ バカなの？」

ムツとする千晶。

清佳「まあいいや。それじゃあ山口さんたちは実夕には何もしてないってことね」

千晶「ええ、そうよ。そうでしょ高見さん。

私たち友達よね」

清佳と千晶、実夕を見る。

実夕、俯きながら拳を握って

実夕「……友達、です」

千晶「ごめんなさいね。辛いことがあったのに気付いてあげられなくて。これからはな

んでも話して。私たち友達なんだから」

実夕「……はい」

千晶、勝ち誇った顔で清佳を見る。

千晶「ということよ。きっちり謝ってもらえるかしら、私たちをいじめっこ扱いしたこ

と」

亜佐美「そうだよ、謝れよ」

実夕、泣きそうになりながら俯いてい  
る。

清佳、実夕を一瞥してから千晶へと向  
き直る。

清佳「勘違いしないでよ。私がわざわざこう  
して話したのは猶予をあげただけ」

千晶「は？ 猶予？」

清佳「うん。私は山口さんがどういう人かっ  
て知らなかったからさ。一応話しておこう  
と思つて。だってあんたがやってるのは誰  
が見ても明らかかなわけだし。もしかしたら  
話して印象が変わることもあるかなって」  
清佳、笑みを浮かべて。

清佳「だからこれは、あんたの善意を試す猶  
予だった」

千晶「ちょっと、言ってる意味が」

清佳、千晶が言い終える前に千晶の顔  
を拳で殴りつける。

椅子から転がり落ちる千晶。

教室が騒然とし、悲鳴が上がる。

清佳、千晶の髪を引っ張って起き上がらせて、机に顔を叩きつける。

清佳、椅子を蹴っ飛ばして叫ぶ。

清佳「よく聞けっ！」

教室がシンとする。

清佳「これから実夕に何かあったら、私はあなたを殴るわ。あなたかどうか確認しないで問答無用で殴る。私に何かする？ いいよ、なんでもしなさい。教科書を破く？ 上履きを隠す？ 全部受け止めてあげるわ。ただしやり返される覚悟はしなさいよ。私は実夕みたいに我慢出来ない質だからね」

清佳の鬼気迫る行動に固まっている亜佐美と樹里。

清佳、千晶の顔を押さえつける力を強くする。

千晶「痛い、痛い痛い！」

清佳「あなたの支配欲に付き合うほど他人は暇じゃないんだ。これが痛いって思うなら

二度と卑怯なことするなっ。気に入らないなら直接文句言え！ その代わり」

清佳、千晶の髪を引っ張って耳元で叫ぶ。

清佳「あんたが何もしないなら、私も何もしない」

怯えている千晶。

そこへやってくる木村高信（38）

木村「おい、なにやってる」

清佳、千晶を投げ飛ばす勢いで離す。

千晶、泣きじゃくり亜佐美と樹里に介抱される。

清佳、そんな千晶を一瞥して。

清佳「代々親子揃って、尊敬できなかったってわけか」

実夕、泣きながら清佳を見つめている。

清佳、ばつが悪そうに実夕から目を逸らす。

○道（夜）

閑静な住宅街を清佳と景子が歩いてい  
る。辺りに人の姿はない。

景子「いやー疲れたねえ」

清佳「ごめん」

景子「謝るようなことした？」

清佳「迷惑はかけたでしょ」

景子、笑って

景子「馬鹿言うな。子どもは親に迷惑かける  
くらいがちょうどいいんだよ。さっきの千  
晶ちゃんだったけ？ あれなんか家では良  
い子して外では女王様気取ってたんだろ。  
親からしたらああいう子どもが一番怖い  
よ」

清佳「そんなもんかな」

景子「親になればわかるさね」

清佳「先過ぎてわかんないわ」

清佳と景子、顔を見合わせて吹き出す  
ように笑う。

景子「しかし、すごい家だったねえ」

苦笑する清佳。

○（回想）山口家・外観（夜）

閑静な住宅街にある豪邸。車三台は置ける車庫付きの洋風住宅。

○（回想）同・玄関（夜）

煌びやかな大理石の玄関。清佳と景子が山口千恵子（46）と千晶に頭を下げている。

景子「娘が大変失礼なことをしてしまい申し訳ありませんでした」

清佳「すみませんでした」

千恵子、不機嫌な表情で清佳と景子を見つめるも、笑みを浮かべて

千恵子「いいんですよ、子どもの喧嘩ですし、怪我也たいたしたことありませんから」

景子「治療費はお支払いしますのぞ」

千恵子「いえいえそんな。シングルマザーのお家にお金なんて請求できませんわよ」

千恵子、悪意的な笑みで

千恵子「ああでもお金はあるでしょうね。ご主人の遺作がたくさんあるんですから。羨ましいですわ。ただ、片親だと教育の方が行き届かない場合もありますわよね。そこは、気をつけていたただかないと」

景子「仰るとおりです」

景子、満面の笑みを浮かべている。

千晶、千恵子の後ろに隠れずと清

佳を睨んでいる。

清佳、うんざりした表情。

○元の道（夜）

並んで歩いている清佳と景子。

景子「しかしあのばあ、もう意気揚々と人をバカにしてたわね。ムカつくの通り越して珍獣見てる気分だったわ」

清佳「昔、父さんの絵買うの断られたらしい

よ。まあ旦那の方なんだらうけど」

景子「ええ？ 覚えてないなあ。ということ

は、旦那も似たり寄ったりってことかな」

清佳「かもね」

清佳、元気ない様子。

景子、清佳を横目でみて

景子「後悔してる？」

清佳「……してない。でもやり方は乱暴だっ

たつて反省はしてる」

景子「そう思えるなら大丈夫。いい大人にな

れるよあんたは。実夕ちゃんのためだった

んだろ」

清佳「……実夕にはさ、何もしないでっつて言

われてたんだよ。自分でなんとかするって。

信じてあげるべきだったのかなって気持ち

ちはあつて、でも同じくらい実夕には無理

だと思つて。あの子は……優しすぎるから」

景子「清佳と友達になるくらいだもんなあ」

清佳、笑つて

清佳「それな」

景子「清佳は実夕ちゃんのために自分の出来ることをしようと思つたんだろ。それをど

う思うかは実夕ちゃん次第だ。気にする必要はないんじゃない？」

清佳「……本当に実夕のためだったのかな」

景子「ん？」

清佳「自信もって言えないんだよ。本当に実夕のために私は動いたのかわかって。私は単に、卑怯なことが許せなかっただけなんじゃないかって」

景子「……ホント、無駄に貞一に似ちゃったね、あなたは」

清佳「父さんなら、自分のしたことに迷ったりしないよ」

景子「確かに、あいつが後悔してるところは見たことないな。でもそれは良いことじゃないぞ。自分勝手と紙一重だ」

景子、懐かしむように

景子「貞一は誠意がないやつが嫌いだった。あいつの言葉でいうなら尊敬できないやつか。自分の絵の価値よりも人の価値を見て売ってたよ。任せたら金はいらないとか

言い出すから、こっちは営業が大変だった  
んだけど」

清佳「苦勞してたんだね」

景子「いい思い出だねー、今となっては」

清佳「父さんには、信念を持ってって言われた。  
それがあれば、大切なものを守れるからっ  
て」

景子「信念っていうのは、自分を持ってってこ  
とだね。世の中、自分を見失ってるやつば  
っかりだから大事だよ。そういう意味じゃ、  
あの山口親子は貞一側だったかも」

清佳「確かに、紙一重」

景子「自分を貫くっていうのは難しいんだ。  
大人になったら貫くことばかりが正解じ  
ゃないし、それが出来なかったら、何かを  
為しえることもきつとできない」

清佳「……うん」

景子、清佳の頭に手を乗せて

景子「私は清佳を尊敬するよ」

清佳、泣きそうになるも涙は流さない。



ない許さない許さない」

千晶、操作していたマウスを止める。  
パソコンの画面には『どうしても呪いたい人がいる人へ』という見出しのト  
ップページ。  
千晶、笑みを浮かべる。  
中央にある『呪い』というボタンがク  
リックされる。

○朝宮家・清佳の部屋

机に向かいキャンパスノートに絵を描  
いている清佳。その絵はお世辞にも上  
手いとはいえない出来。

景子、後ろから絵を覗いて。

景子「うわ、下っ手」

清佳「びっくりした！勝手に入らないでよ」

景子「ノックしたわよ。それだけ集中できる  
のに、この画力は……」

清佳、キャンパスノートをひっくり返  
して隠す。

清佳「うるさいうるさい。もう何の用よ」

景子「あんた宛てに手紙」

景子、シンプルな茶封筒を渡す。

清佳、受け取り怪訝な顔で

清佳「差出人の名前ないんだけど、気持ち悪

っ

景子「でも消印はついてるわよ。なんなの。

ほら開けて開けて」

清佳、渋々封を切り、白い紙を取り出

し読み上げる。

清佳「えー、朝宮清佳さま。厳選なる抽選の

結果、当選したことをなんとらなんとら」

清佳、茶封筒を逆さまにするとと、黒

いシンプルな葉が出てくる。

景子「やったじゃん」

清佳「いや私、懸賞とか出した覚えないんだ

が」

景子「清佳の名前だと当たりやすいのよねえ」

清佳「お前か」

景子、舌出して見せる。

清佳、葉をつまんで

清佳「センスない。こんな黒いの誰が使——」

清佳、葉に目を奪われ一瞬放心状態になる。

景子「清佳？　どした？」

清佳「……あ、いやまあ捨てるのはあれか」

景子「いいじゃん使えば。あんたモノク好きでしょ。服地味だし」

清佳「それは母親譲りだよ」

景子、逃げるように口笛を吹きながら部屋を出て行く。

清佳、もう一度葉を見つめ首を傾げる。

○同・玄関・中（夕）

靴を履いている清佳。

やってくる景子。

景子「おや？　おでかけ？」

清佳「いや塾だから」

景子「ああそうか。でも今週は学校休んでるんだから塾も休んでいいわよ？」

清佳「塾まで謹慎する必要ないでしょ。元々  
学校休むこともなかったんだから」

景子「実夕ちゃんと会うかもよ？」

清佳、靴の紐を結ぶ手を一度止める。

清佳「……いつまでも避けてられないでしょ。

無視されるならそれでいい」

清佳、立ち上がる。

景子、苦笑して

景子「今日、仕事がてら友達と飲んで帰るか  
ら遅くなるわ。戸締まりして寝るのよ」

清佳「わかった」

清佳と景子、顔を合わせて

清佳「いってきます。いってらっしゃい」

景子「いってらっしゃい。いってきます」

清佳、家を出て行く際、もう一度振り返ると景子が手を振っている。

扉が閉まる。

○バス停（夕）

歩いてくる清佳。バス停には誰もいな

い。

清佳、ほっとしたように息を吐く。

清佳「なにほっとしてるんだか……」

ベンチに座る清佳。

鞆から文庫本を取り出し挟んであった黒い栞を取って読み始める。

老婆の声「お嬢ちゃん、良い物を持つてるね」

清佳、はっとして隣りを見るといつの間にか真つ黒な口―ブを羽織った老婆（80）が座っている。目深のフードから気味悪い目を清佳に向けている。

絶句する、清佳。

清佳「……なん、ですか」

老婆「その栞のことさ」

清佳、黒い栞を見つめる。

清佳「欲しいなら、あげますけど」

老婆「おや、いいのかい？　ならおくれ」

老婆、清佳に手を差し出す。

清佳、栞を渡そうとするも手が動かない。

老婆「どうしたんだい？」

清佳、棊を渡そうと躍起になるが手は動かない。

清佳「なにこれ……」

老婆「ひひっ、呪いは他人に渡すことは出来ないからさね」

清佳「は？ 呪い？」

老婆「そうさ。そいつは呪われた者しか持てない棊さ。捨てることも人に渡すことも出来ないんだよ」

清佳、老婆に怯えつつも

清佳「……そんな非現実な話、信じてでも？」  
老婆「それはお嬢ちゃん次第だ。しかしまだ若いのに可哀想にねえ。お嬢ちゃんが持っているのは一番強力な呪いだ。誰かに恨まれるようなことをしたのかい？」

○（回想）山口家・玄関

千恵子の後ろに隠れ、清佳を睨み付けている千晶。

老婆の声「そうだね。その子で間違いない」

○元のバス停（夕）

清佳、老婆を驚き見つめる。

老婆「その子に呪われたんだ。朝宮清佳ちゃん」

清佳「……なんで、名前」

老婆、無言で笑う。

清佳、震える手を拳を握り締めること

止める。

清佳「呪われて……私は死ぬってことですか」

老婆「より残酷な結末を迎えるだろう」

清佳、平静を保ちながら強がるように

清佳「……こんな、布きれ一枚で人を殺せる

なんて。安易なものですね」

老婆「それでもないさ。呪いは生き物だから

ね。特に命を喰う呪いはリスクがある」

清佳「リスク。どんなですか？」

老婆「お嬢ちゃんが知っても意味がないこと

さ。呪われた人間側にはね。ひひっ」

老婆、気持ち悪い笑みを浮かべる。

清佳「……」

清佳、大きく深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

老婆「歳に似合わない冷静ぶりだねえ。呪われたんだよ。怖くないのかい？」

清佳「……そりゃ怖いですよ。なんならあなたの風貌も怖いですし。まあでも、因果応報なのかなって」

老婆「ほほう」

清佳「呪いとか、死ぬとか、実感が湧かないだけかもしれないね」

老婆「ひひっ！ 気に入ったよお嬢ちゃん」

清佳「全然嬉しくない」

老婆「親御さんの教育の賜物かな」

清佳「あ、それは嬉しいかも」

老婆「お礼に呪いを解く方法を教えてあげようか」

清佳「……え？」

老婆「呪いの解き方だ」

目を合わせる、清佳と老婆。

清佳「そんなものが？」

老婆「あるよ。言っただろ。呪いは生き物だからね。好き嫌いがあるんだ」

老婆、清佳に顔を近づけて

老婆「目を閉じてごらん」

清佳、躊躇いながらも目を閉じる。

老婆「お嬢ちゃんが一番の友達是谁だい？」

○（回想）道

入学式の日、隣で笑う実夕の姿。

○元のバス停（夕）

目を閉じている清佳。

老婆「その子になら葉を渡せるよ。そうすれば、お嬢ちゃんは解放される」

焦り目を開ける清佳。しかし目の前に老婆の姿はない。

遅れて、老婆が背後から清佳の両肩に手を置く。

恐怖で振り返れない清佳。

老婆「真っ直ぐな子どもが曲がるさまはいつ見ても愉快だね。楽しみにしてるよ。ひひっ」

老婆、清佳の両肩から手を離すと、姿が消える。  
一人になった清佳は、震える手で朶を見つめる。

○同（夜）

バス停のベンチで一人、呆然としている清佳。夜の帳が完全に落ちて、道路には街灯が灯っている。

朶を見つめる清佳。

老婆の声「その朶を渡せば解放されるよ」

清佳、朶を握り絞めて

清佳「：：安い、信念よね」

実夕の声「清佳ちゃん？」

清佳、声の方へ顔を向ける。

実夕「おうち行ったら、おばさんが塾行った

って。間に合わないと思ったんだけど」

そっと歩み寄ってくる実夕。

清佳、慌てて栞を握った手をポケットに入れる。

実夕、おそろおそろという風に清佳の隣りの、少し距離を空けて座る。沈黙する一同。

清佳、実夕が手ぶらなのを確認して

清佳「……塾、休むつもりだった？」

実夕「うん、清佳ちゃんも休むと思ったから」

また、沈黙する一同。

清佳、ポケットに入ったままの手を握り絞める。その手の中には栞がある。

清佳と実夕、互いに俯いたまま

清佳 & 実夕「ごめん」

顔を見合わせる清佳と実夕。

清佳「なんで実夕が謝るの？」

実夕「どうして清佳ちゃんが？」

顔を見合わせたまま呆ける清佳と実夕。やがて、実夕が吹き出すように笑う。

清佳、つられて笑みを浮かべて

清佳「私は自分勝手に動いたの。実夕を助けたい……っていう気持ちにはあつたけどそれはきれいな事で、結局私は」

実夕「卑怯なことが許せなかった、でしょ」

清佳、頷いて

清佳「望まれてないのに自分勝手に動いた。

だから、ごめん。おまけに私はその責任を」

清佳、ポケットに入れたままの手を強

く握りしめる。

実夕「……毎朝、隠された上履きを探すのが大変だった。教科書もノートも、新しいの買ってってお母さんに言いづらくて。みんな山口さんが怖くて、私とは誰も話してくれなくなつた」

清佳「……」

実夕「始まりはね、去年流行った無視ゲームだったの。誰か一人を無視するっていう……女子はあるあるだよな」

清佳「そんなの流行ってたんだ」

実タ「普通はグループ内でやるから外から見  
たんじゃわからないと思う。でもうちの場  
合、山口さん主導でクラスの女子全員が一  
人を無視するんだ。私が一番最初だった」

実タ、自分の膝の上で服を握り締める。

実タ「ああいうのって順番だから、我慢して  
たけどいつまでたっても終わらなくて。終  
わったと思ったらいまみたいになってた  
んだ。山口さんのグループに入れられて、  
毎日」

清佳「それからずっと？」

実タ「うん」

清佳「塾では、そんな素振り見せなかったね」

実タ「だって、私の一番大事な時間だったん  
だもん。毎日、死にたい死にたいって泣い  
てたけど、週に二回、清佳ちゃんとお喋り  
できるのが楽しみだった」

実タ、涙を流して

実タ「私、私立受けなかったんだ。落ちたの  
は嘘」

清佳「どうして。それで山口さんとは離れられたじゃん」

実夕「元々、私立受けるのはそれが理由だった。でもね、それじゃダメだって。そうやって逃げるのは卑怯だって」

清佳「……実夕」

実夕「私、清佳ちゃんに相応しい友達になりたかった。同じ学校に行ったらずっと一緒にいられるって思った。そのためには、ちゃんと戦わないとって思ったの」

清佳「……」

実夕「でもダメだね。やっぱり怖くて何にも変えられなくて。それで結局、清佳ちゃんに助けられちゃった。ごめんね、私弱くて」

清佳、悔しそうに首を振る。

清佳「違うよ、実夕。私は……私はそんな立派な人間じゃないんだよ。私は」

実夕「清佳ちゃんは私の憧れで、私の一番の友達」

実夕、清佳との距離を詰めて、清佳の

手を握ろうとするも清佳の手はポケット  
トに入っていて握れず、袖を小さくつ  
まむ  
実夕、泣きながらも笑顔で  
実夕「ありがとう、清佳ちゃん。私、救われ  
たよ」

清佳、俯いて

清佳「間違ってる、なかったのかな」

実夕「え？」

清佳「ううん、なんでもない」

清佳、ポケットから手を出して実夕の  
手を握る。

### ○道（夜）

閑静な住宅街を歩いている清佳。

空を見上げると、満天の星空と満月が  
輝いている。

### ○（回想）公園（夜）

ベンチに座り話している清佳と実夕。

清佳「じゃあ実夕、今日、山口さんの家行っ  
たの？」

実夕「ついさっきね。お母さんにもついてき  
てもらったから偉そうなことはいえないけ  
ど。もうやめてってはつきり言った」

清佳「そっか。どうだった？」

実夕「何も。睨んでくるだけだった。むしろ、  
お母さん同士が大喧嘩したくらいで」

清佳「ははっ、おばさんらしいね」

実夕「怖かったけど、ちゃんと言えたよ。清  
佳ちゃんを見習って」

清佳「私は言うよりも手を出してしまったん  
ですが」

実夕「でもクラスでは人気者だよ。みんなも  
う山口さんの言いなりになるはやめよう  
って言ってる。みんな私に謝ってくれたん  
だ」

清佳「そっか。でもそれで今度は山口さんが  
いじめられるパターンは御免だけど」

実夕「私もそれは嫌だ。辛いのは知ってるから。」

あれから山口さんもずっと休んでるし、ちよつと心配」

清佳「あんたもつくづくお人好しだね」

実夕「みんな、清佳ちゃんが戻ってくるの待ってるんだよ。明日は来るでしょ」

清佳「明日か」

清佳、苦笑する。

実夕、不安げに

実夕「清佳ちゃん？」

清佳「行くよ。明日、ね」

清佳、実夕に優しく微笑む。

### ○元の道（夜）

住宅街の夜道を一人歩いている清佳。

老婆の声「本当にいいのかい？」

足を止める清佳。

すぐ近くの電信柱の隅に老婆が闇に同化するように立っている。

老婆「渡せる相手はあの子だけだ。でないとお嬢ちゃんは」

清佳「実夕を助けるためにしたことです。そんな実夕に一番の友達だって言ってもらえた。それで十分です」

清佳、ポケットから栞を取り出して見つめる。

清佳「私が責任を取らなきゃ、卑怯って話ですよ。じゃないと、地獄で父さんに顔向け出来ないから」

老婆、嬉しそうに笑う。

老婆「タイムリミットは今夜だ。考え直すならそれまでにね。ひひっ」

清佳、老婆を一瞥して

清佳「：：山口さんと話す機会があるなら伝えてもらえますか？」

老婆「ほう、なんだい」

清佳「実夕に手を出したら、地獄からでも呪ってやるって。でも：：何もしなければ何もしないって」

老婆「ちゃんと伝えよう。ひひっ」

清佳、老婆を一瞥してから歩き出す。

○朝宮家・玄関前（夜）

清佳、引き戸を開けようとするも鍵がかかっている。

清佳「そっか：：母さんいないんだった」

清佳、悲しそうに

清佳「最後に、会いたかったな」

清佳、庭の隅にあるアトリエを見てそちらへと歩き出す。

○同・アトリエ（夜）

鍵を開け、入ってくる清佳。

月明かりが差しこむ室内で、イーゼルに立てられた真っ白なキャンバスを見つめる。

清佳、自嘲気味に笑って壁に寄りかか。ポケットから葉を取り出して見つめる。

清佳「呪われて死ぬんだから、当然地獄行きだよ。父さんと、いずれ母さんにも会えるか」

清佳、その場に座り込み葉を握りしめる。

清佳「……死にたくないな」

清佳、恐怖と不安に涙しながらゆっくりと目を閉じる。

○（夢の中）同・アトリエ

一人、眠っている清佳。そこへ朝宮がそばによつて来て、清佳の頭を撫でる。

清佳、薄目を開けて

清佳「あの世への案内人が父さんとかベタ過ぎない？」

清佳、起き上がって朝宮を見つめる。

清佳「ねえ父さん。私、父さんに言われた通りのこと出来たよね」

朝宮、微笑むだけで何も言わない。

清佳「私のこと、尊敬してくれる？」

清佳の視界はだんだんと白んでいき、朝宮の姿が見えなくなる。

○元の朝宮家・アトリエ

朝日の陽光が差しこんでいる室内。

清佳、目を閉じて涙を流している。そしてゆっくりと目を開ける。

清佳「……夢」

ハツとして立ち上がる清佳。

清佳「生き、てる？」

アトリエに入ってくる景子。

景子「あー！ いたいた。もう部屋行ったら

いないから。なに、ここで寝たの？ て

いうか私服のままじゃん」

清佳「あ、いや……」

清佳、放心状態。

景子、清佳の両頬に触れる。

景子「うん。君は相変わらず可愛いな」

清佳「酒くさっ、いま帰ったの？」

景子「いやぁ盛り上がっちゃってさー」

景子、清佳に抱きつく。

清佳、景子を引きはがしながら

清佳「うわ、この酔っ払いが。離せ」

景子「嫌よ嫌よも、好きのうち」

清佳、自分の手に栞がないことに気付いて

清佳「あれ？栞は」

景子「ええ、誰その子。可愛いのか？」

清佳、景子を突き飛ばしてアトリ工内を探すが栞は見つからない。

清佳「：：どういうこと」

立ち尽くす、清佳。

○晴良中学校・校門前（朝）

一人悩むようにして登校してくる清佳。チャイムが鳴っており、生徒の何人が急ぎ足で清佳を追い越していく。校門のところに立っている木村。

木村「朝宮、急げ。遅刻になるぞ」

清佳、顔を上げて

清佳「先生、すいませんでした。色々」

木村「何言ってるんだ、ちよつと休んだくらいで。すぐにホームルーム始めるから早く

行きなさい」

清佳「……はい」

清佳、首を傾げながら急ぐ。

○同・教室（朝）

教室に入ってくる清佳。

クラスに変わった様子はなく、清佳を  
気にする生徒もいない。

清佳、自分の席につきながら、千晶の  
席が空席であることを確認する。

歩み寄ってくる、実夕。

実夕「清佳ちゃん、おはよ。遅かったね」

清佳「ああうん。色々あって。実夕はもう大

丈夫？」

実夕、首を傾げながら

実夕「私？ うん、大丈夫だよ」

清佳、実夕の反応に怪訝な表情。  
千晶の席を一瞥して

清佳「山口さんは今日も休みか」

実夕、清佳の視線を追って千晶の席を

見て、清佳に視線を戻す。

実夕「山口さんって？」

清佳「………え？」

互いに見つめ合う清佳と実夕。

清佳「山口さんだよ。山口千晶」

実夕「山口、千晶？」

清佳「ちよつと実夕。冗談ならやめて。私が  
そういうの嫌いなもの知ってるでしょ」

戸惑う様子の実夕。

そんな実夕を見て混乱する清佳。

清佳の近くにいた亜佐美と樹里が清佳  
を一瞥して

亜佐美「山口って誰のこと？」

樹里「さあ」

亜佐美と樹里の会話を耳にし、絶句す  
る清佳。

実夕、ばつが悪そうに

実夕「ごめん、清佳ちゃん。何言ってるのか  
わからなくて。その人、友達なの？ 別の  
クラスとか？」

清佳、実夕を呆然と見つめる

○（フラッシュ）バス停（夜）

話している、清佳と老婆

老婆の声「命を喰う呪いはリスクがある」

○元の晴良中学校・教室（朝）

清佳、口元を手で覆う。

清佳「……まさか」

実夕「清佳ちゃん、大丈夫？　顔色悪いよ？」

清佳「……ねえ実夕。私、なんで先週ずっと

休んでたんだっけ？」

実夕「え、家庭の事情だったんでしょ。詳しく

く聞いてないけど」

清佳、教室を飛び出す。

実夕の声「清佳ちゃん？」

○道（朝）

上履きのまま、住宅街を走っている清佳。

清佳「あり得ない。絶対に、そんなこと」

清佳、息を切らして走り続けるも、や

がて歩幅を狭めて立ち止まる。

清佳の前には、住宅同士の間にも不自然

に空き地となった広いスペースがある。

呆然としている清佳。

老婆の声「おめでとう」

振り返る清佳。

そこには老婆が立っている。

老婆「お嬢ちゃん側が食われなかったのは初

めてだよ。みんな友達に渡しちゃうからね」

清佳「……山口さんは？」

老婆、微笑んでいる。

清佳「死んじやったんじゃないの？　山口さ

んはどうなったのっ？　家が無くなっ

てる。実夕も、みんな、誰も覚えてない！」

老婆「食われたからね。私は呪われたなら死

ぬとは一言も言っていないよ。ひひっ」

ハツとする清佳。

老婆「命を喰う呪いはリスクがあるんだ、と

ても大きなね。条件が満たされなければ自分に返ってくるんだよ」

清佳「……条、件」

老婆「誇っていい。お嬢ちゃんが勝ったんだ」

清佳、震えながら一歩下がる。

老婆「ここでいう命とは、存在そのもの。そして影響は本人だけでなく血縁関係全てに及ぼすものだった。まあそこまで範囲を大きくしなければ実現しない呪いだっただけだがね」

清佳「あり得ない。だって人が、家族が丸ごと消えたら」

老婆「影響大きいね。でも大丈夫、世界はやがて順応する。現に山口家の存在を覚えているのはもう私たちだけださ。お嬢ちゃんも、時間の問題だ」

絶句する、清佳。

老婆「お嬢ちゃんの言づてはちゃんと伝えたよ。まあ死にたくない助けてと泣き喚いていて伝わったかはわからないが。お嬢ちゃ

んに比べるとみっともない限りだったよ」

清佳、震えながらも拳を握り締めて

清佳「もし、私が実夕に栞を渡していたら、消えていたのは……」

老婆、悪意的に笑ってみせる。

清佳「……あなたのせいだ。呪いなんてもの、あんたが山口さんに渡したんでしょ！ そんなものがなければっ」

老婆、懐から黒い栞を取り出す。

老婆「私は道具を与えただけさ。ちゃんとりスクも説明した」

清佳「そんなの！」

老婆「取り乱すなんてらしくないじゃないか。そもそも、原因を作ったのはお嬢ちゃんだろ？」

老婆、清佳に歩み寄り耳元で囁く。

老婆「大丈夫、すぐ忘れるよ。良い人生を。

朝宮清佳ちゃん」

一瞬にして老婆の姿が消える。立ち尽くす清佳。振り返り、空き地と

なつた土地を見つめる。

清佳「……私、が」

吐き気がこみ上げ、その場で嘔吐する。  
清佳。両手を見つめ、頭を抱える。

○晴良中学校前（朝）

一人、そわそわとしながら辺りを見回すように立っている実夕。  
放心状態でフラフラと歩いてくる清佳。

実夕「清佳ちゃん！」

駆け寄る、実夕。

実夕「清佳ちゃん、よかった。どこ行ったらいいかわかんなくて。大丈夫？ 真っ青だよ」

清佳「……実夕」

清佳、脱力しその場でしゃがむ。

実夕「何かあったの？」

清佳「仕方、なかつたの。大切なものを守りたくて、自分の信念に従って……でも、でもそのせいで」

実夕、戸惑いながらも清佳の手を握る。  
実夕「よくわからないけど……私は、そんな  
清佳ちゃんを尊敬してるよ。一番の友達だ  
って」

○（フラッシュ）朝宮家・アトリエ  
清佳の頭を撫でる朝宮。

○元の晴良中学校前（朝）

清佳、実夕の胸に頭をつけて号泣する。  
清佳「あああああっ わあああああ」

実夕、黙って清佳を抱きしめる。  
清佳、実夕を抱きしめ返しながら涙を  
流す。

「了」